

アリストテレスにおける感覚の問題

齊藤和也

Literalism と Spiritualism の論争は息の長い論争である。1974年に書かれた論文において、R. Sorabji は、アリストテレスの心身関係論においてデカルト的な意識論はほとんど見られないとし、特にその感覚論解釈においては、感覚器官が感覚的性質を文字通りに受容する生理学的な過程が（質料的原因として）感覚を構成すると主張した。これは、一方で、F. Brentano の「志向的内在」に代表される意識論的解釈を牽制すると共に、他方で、T. J. Slakey に代表される感覚の活動を感覚器官における生理学的過程に還元する解釈に対抗して、感覚には質料的原因と共に形相的原因があることを明らかにしようとするものであった¹。1983年に M. Burnyeat が、Brentano 的な解釈の方向性を持った草稿を書き、感覚活動においてはいかなる生理学的変化も物質的変化も起こってはいないとの主張を行い、ここから論争が始まる。Sorabji と Burnyeat の間の論争を皮切りに、解釈の対立が二つの陣営の間での論争という様相を呈し、さらにこれらの中間を占める解釈も出現した²。いずれの解釈にも弱点があり、この論争にはまだ一応の決着さえ付けられていない³。筆者は、かつて、Burnyeat 説を批判する論文を発表したが⁴、現時点では、アリストテレスの感覚論を形相質料論の枠組みから解釈するためには、Burnyeat が DA II 5 の解釈論文で解明した感覚能力の特徴付けを踏まえた感覚論の解釈が必要であると考えている。本論では、まず、Sorabji 説を批判して自説の優位性を示した Burnyeat の議論の論点をまとめ、次に、視覚の成立における自然学的因果連関の根拠を示すテキストを確認し、さらに、Burnyeat の解釈を踏まえて II 5 を分析する。その上で、形相質料論の枠組みで感覚能力と感覚器官の関係について考察を進める。

1

Burnyeat によれば、Sorabji 説のポイントは次の通りである⁵。質料を伴わずに形相を受け入れることは厳密に生理学的な過程であり、感覚器官は全く文字どおりに色や臭いを

¹ Sorabji (1974) 68, 75.

² Caston (2005) を参照。

³ Shields (2016) は、感覚の感覚対象への類同性に関して難点があるとしつつも Literalism に好意的な評価を下している (General Introduction, xxxvii)。

⁴ 齊藤 (1998)

⁵ Burnyeat (1992) 17-18.

受け入れる。硝子体 (eye-jelly) は赤くなるのであり、鼻の中で何かが臭うようになる。この過程は感覚者による色や匂いの気付き (awareness) に対して、質料-形相関係に立つ。この気付きは、二元論のように、生理学的過程に付加されるものではないが、硝子体における赤色の形相の受け入れという生理的過程は、赤色を見ることを構成する (constitute)。それは石や木材が家を構成するのと同様である。これに対して、Burnyeat は、「質料を伴わずに感覚的形相を受け入れる」のは感覚能力であって、感覚能力に感覚的形相が受け入れられるときには、感覚器官の生理学的変化は必要がなく、感覚能力は感覚対象から直接に、いわば形相的に作用を受けて感覚対象を登録し、気付き、感覚すると主張する。さらに、Burnyeat は、色が媒体としての空気に作用し、さらに空気が目に作用するという自然学的な因果連関については、実際の性質変化ではなく疑似的な性質変化であるとする。

しかし、この因果連関は明示的に示されているので、アリストテレスの強固な信念であったと考えられる。これを否定することは難しい。しかし、一方で、Burnyeat が感覚能力に着目した点は重要である。感覚することの主体が感覚能力、つまり魂であることを踏まえるなら、ここにも焦点を当てる必要がある。Sorabji と Burnyeat の解釈の一面性を乗り越えて、アリストテレスの感覚論の全体像を捉える必要がある。

2

五つの感覚のうち、視覚が感覚理論一般を主導するモデルであることは明らかである。まず、視覚成立の自然学的な説明において語られていることが、疑似的な性質変化ではなく、真正の性質変化であることを確認しておきたい。視覚の対象として、色は「見られうるもの」であり、「見られうる原因を自らのうちにもつ物体の表面にある」(DA 418a29-30)。色が見られうる原因であるとは、色が現実態にある透明なものを動かす力があることを意味している (418a31-b1)。色は直接視覚に作用するのではなく、媒体となる空気に作用してこれを性質変化させ、この性質変化の連鎖の終点において「見ること」を作り出す (Sens. 438b3-5)。媒体における性質変化の連鎖については、『自然学』では次のように言及される。「色が光に連続し、その光がわれわれの視覚に連続している」(Phy. VII 2, 245a6-7)。このことは聴覚や嗅覚、味覚においても同様である (245a7-9)。『自然学』の記述において媒体が光になっているのは、光が透明なものの現実態であるからである。透明なものは、水や空気のみならず、そのほか水晶などの固体にも、さらには天上の永遠の物体にも共通する実在である (DA 418b8-9)。光は、火的なものが現在するときに透明なものが透明なものとして現れる状態である (418b11-13, 16)。光の欠如としての闇は透明なものの可能態である。透明なものはそれ自体では見えないが、色を持つ他の物体の色を通じて見える (418b5-6)。

Burnyeat は、色が透明なものを動かすとされている点について、これは、実際の性質変化ではなく疑似的な性質変化であるとする⁶。透明なものが存在するのは、変化や出来事がそこに生じるためではなく、色がそこを通過して視覚能力に作用するためであり、その存在は視覚成立の静態的な条件にすぎないと主張する。この主張の根拠は、透明なものの性格にある。Burnyeat によれば、透明なものは固有の色を持たず、色によって性質変化しないのである⁷。

『感覚と感覚されうるものについて』では、透明なものは固有の色を持つ他の物体にも含まれるという新たな論点加わる。色は物体の表面にあるが、物体の中には多かれ少なかれ透明なものが存在していて、その端が色である。この色を持つ同じ実在が物体の内部にも存在していて表面と同じ色になっている (*Sens.* 439a31-b1)。つまり、透明なものの量の多寡によって物体の色の変異が生じる。大気や海水は限定されにくい性質のため、近くから見た場合と遠くから見た場合とで色合いが異なるが、明らかに色付いている (439b1-5)。「透明なものは、それが物体に属する程度に応じて、その物体に色を持たせる」(439b8-10)。このように、透明なものは固有の色を持つ物体の中でその物体の色を担う実在である。Burnyeat は、透明なものは固有の色を持つ物体のように色付いてはおらず、それを通して物体の色が現れるときに派生的な意味において色付いているとするが、大気や海水は限定された形の物体の色と比べると色を持っていないと思えるほど薄い、それ自体の色を持って色付いているのであり、色付きの程度の変化により性質変化しているのである⁸。

Burnyeat は、音や匂いが媒体を通して感覚器官に性質変化をもたらすことも疑似的であると主張したが、アリストテレス自身がこれらを疑似的であると考えていたと証明することは難しい⁹。これに対して、Burnyeat が行った II 5 の分析は、感覚能力の自然学的枠組みへの包摂の仕方を明らかにしたものとして評価される。

3

II 5 では、感覚の成立の解明が自然学的概念の枠組の中に置かれる。「感覚は動かされることと作用を受けることにおいて生起する。なぜなら、感覚はある種の性質変化であると思われるからである」(416b33-34)。これが、感覚を一般的に語る際の出発点である¹⁰。

⁶ Burnyeat (1995) 424-26.

⁷ Ibid. 425.

⁸ Broackes (1999) は、色を持つ物体における透明なものの濃度が媒体と感覚器官に性質変化をもたらすという図式を与えている (p. 66)。

⁹ 詳しくは齊藤 (1998)、Johansen (1998) 145-47, *ibid.* (2012) 167-69 を参照。

¹⁰ この文を「感覚は感覚器官が動かされることと作用を受けることにおいて生起する」と解釈することもできる。Shields (2016) xxxiii. Simplicius (1882) 117, 7-9. しかし、アリストテレスは、感覚器官と感覚能力を峻別して語り出してはいない。

ここで『生成消滅論』I 7 で確立された作用・受動の図式が感覚に適用される。その図式では、類を同じくするもの同士が種において反対の関係にある場合、作用を受けた方が自らの性質を喪失し、作用したものに似た性質のものになる。この章において、似たものによって作用するのはいかにして可能かという問題が設定されるのは、Burnyeat が指摘するように、先行の自然学者たちが「似たものによって似たものを感覚するとか、似たものによって似たものを認識すると主張した」ことを受けているためである¹¹。つまり、感覚や認識の図式を自然学的な作用・受動の図式に適合させるためである。その試みへの着手が、アポリアの提示である。アリストテレスは、感覚器官はその内部に諸元素を含んでおり、感覚はこれらの元素自体及びそれらの付帯性についてのものであるのに、なぜ自分自身を感覚することにならないのか、あるいは、なぜ外部のものがなければ感覚しないのかという問題を立て、感覚が外部のものの作用による外部のものについての認知であることを明らかにしようとする。彼は、感覚能力がそれ自身ではその活動状態に移行することがないことを、可燃物がそれだけでは発火せず、現実態における火を必要とすることを範例に取って説明する。この範例の図式を感覚に適用するには、性質変化の両端を明らかにする必要がある。つまり、可能態と現実態の区別が必要である。可燃物の範例は、「すべて性質変化するものは、作用する能力を持った現実態にあるものによって作用を受け動かされる」(417a17-18) という図式に基づいている¹²。この図式を似たものによる作用の観点から書き換えると、「作用を受ける前は、作用するものとは（現実には）似ていないものが、作用を受けたあとには、（現実には）そのものに似たものになっている」(417a18-20) という図式（予備的定式）が得られる。

この図式と共に、そしてそれに先だってアリストテレスは、一見受け入れがたい前提を持ち込む。「作用を受けることと動かされることと活動状態にあること (*ἐνεργεῖν*) とは同じものであるとしてこれから語っていこう」(417a14-16)。この同一視の理由付けを 417a18 まで拡張するなら、この言明は、概念的同一性ではなく、出来事の一体性を述べていると解釈することができる¹³。建築は建築されるものの未完了な活動状態として運動であるが、同時に建築家の技術の活動状態でもある。そしてその活動状態は建築されるものの中にある。この意味において建築としての運動と建築技術の活動状態とは同じものであるといえる¹⁴。しかし、この解釈では、「活動状態にある」という言葉が感覚能力の活動状態を指していないことになるので、この章の後半での主要な成果とのつながりが見えてこない弱点がある。「すでに活動状態にあるもの」(417a12) という表現があるので、この一見不可解な言明については、感覚の正確な解明ができるまでの暫定的想定と

¹¹ Burnyeat (2002) 35, 410a24-25. なお、GC 323b30-4 では、反対のものを似ていないものと言い換えている。

¹² これは『自然学』III 1-3 において確立された。

¹³ Shields (2016) 215.

¹⁴ Cf. *Phy.* 202a14-21.

する解釈が自然であろう¹⁵。

アリストテレスは、作用・受動の図式の援用だけでは、感覚の活動状態を捉え切れないと判断して、さらなる分析を進める。この図式は、感覚能力をすでに持っているそれを活動状態へ移行させる場面を特定しない。この特定のために持ち出されたのが、可能態から現実態への3段階図式である。人間が知識ある者であると言われる3つの段階がある。

(A) 人類の一員であるという意味で、人は知識ある者である。

(B) すでに具体的な文法知識を持っている人を知識ある者という。

(C) すでに持っている知識を実際に働かせている人が本来の意味で知識ある者である。

このうち、(A) と (B) が可能的に知識ある者であり、(B) と (C) は現実知識ある者である。(B) はどちらの呼称でも呼ばれる。(A) は第一の可能態に、(B) は第二の可能態にあると共に、第一の現実態にある¹⁶。(C) は第二の現実態にある。(A) と (B) は、共に可能的に知識ある者であるが、(A) は、学習過程によって変化し、無知という知識とは反対の状態から繰り返し転化して知識ある者になる。こちらは、「通常の性質変化 (1)」である。(B) は、すでに知識を持っていてそれを働かせていない状態から働かせている状態へ進展して知識ある者になる。これは (1) と「異なる仕方での変化 (2)」である。「作用を受ける」ことも単一ではない。『生成消滅論』I 7 で確立した図式では、通常の変化において作用を受けることは、「反対のものによるある種の破壊 (3)」である。冷水が火によって沸かされ熱水になったとき、冷たいものは破壊される。これに対して、(B) が持っている知識を働かせ思考活動をする場合、現在持っている性質の喪失ではなく、「現実態にありかつ似ているものによる可能態にあるものの保存 (4)」である。これは可能態から現実態への進展であり、自己への進展であるから、このタイプのものは性質変化とは言えない。強いて言うなら、別の種類の変化と言うしかない。確かに、全く変化していないわけではなく、可能態から現実態への存在状態の変化は認められる。

II 5 では、このほかにもう一つの対立が提示される。(A) から (B) になって知識を獲得した人が、何らかの事情でこの知識を失った場合は、「欠如的状态への転化 (5)」であるが、無知から知識への転化は、人間の自然的成長に沿った「自然本性への転化 (6)」である。したがって、(6) は (1) を自然的発展の文脈で記述したことになる。

知識ある者のこの三つの段階の図式に感覚はどう対応するのか。第一の可能態は、受胎時から始まる。第二の可能態の始まりは出産時である。これは第一の現実態でもあり、生まれたときにはすでに動物は見る能力を持っている。そして、第二の現実態は、実際に感覚能力を働かせることである。このような対応関係があるが、感覚は知識とは違い、第二の現実態へ進むには外的な作用者が必要である。これに対して、知識を働かせるかどうかは自分自身の意思で決められる。

¹⁵ Simplicius (1882) 120, 8-11. Philoponus (1897) 296, 16-21.

¹⁶ 本文中では、(B) は、現実態という言葉で語られていないが、412a21-23 において言及されているので、問題はない。

以上の3段階の図式によって、感覚について何が明らかになったのか。

Burnyeatによれば、感覚の活動状態への移行は(2)及び(4)の形態に属するが、これは反対のものによる破壊の図式に従う通常の性質変化ではなく、異例の性質変化(extraordinary alteration)である。アリストテレスは、最終的には、感覚の活動状態への移行にも「作用を受けること」や「変化すること」を否定する見解を持つに至ったが¹⁷、II 5においては、知識には「変化すること」を否認するが、感覚には「別の種類の変化」を割り当てることになった。その理由は、感覚の場合、移行の原因が魂の外にあるという点にある。また、アリストテレスが(2)及び(4)に新語を用意しなかったのは、感覚の内容が客観的真理であることに受動性が必要だとみなしたためである。そのような造語は『生成消滅論』や『自然学』の理論的枠組みとのつながりを切ることになり、これらの移行を説明する力が失われてしまうと考えたのである。

この診断は、Burnyeatの立場を否定する人々にとっても重要な指摘である。II 5の分析を通じて自然学と認識論とを結ぶ結節点としての感覚能力の位置が確立した。知識ある者がその知識を保存することは自己への進展(*ἡ ἐπίδοσις εἰς αὐτό*)であるのに、敢えて、性質変化(*ἀλλοίωσις*)という名称を残したのは、「似ていないものが作用を受けたことの結果、作用者に似たものになる」(417a18-19)という予備的定式(本稿 p.4)を洗練された形で「感覚しうるもの」に適用するためであった。II 5において最終的に確立された定式は、「感覚しうるもの(感覚能力)は、感覚対象がすでに現実態において持っているような性質を可能態において持っている」(418a3-4)というものである。つまり、作用を受けるときは、感覚能力は感覚対象に似ていないが、作用を受けた後はすでに感覚対象のような性質になっているのである。ここに自然的世界との作用・受動の中で魂によって感覚的真理が獲得されることの理論的根拠が確立された。洗練された形での定式が予備的定式と異なる重要なポイントは、「似ていないもの」が作用を受けた結果、それ自身の性質を失うのではなく、それが可能態において保持していたものが保存されるということである。

4

知識の不活動状態から活動状態への移行において、文法に関わる知識は全体として保存されるが、感覚能力はその時々に変わる感覚対象に似た性質を持つことになるなら、保存されるものは何なのであろうか。白くなった場合、白い性質が保存されるなら、そのほかの可能態は失われるのだろうか。だが、感覚能力の性格はそのようなものではない。そのほかの可能態が失われることはなく、感覚的形相によってその都度いずれにもなるという

¹⁷ Burnyeat (2002) 68. *DA* III 7, 431a4-7.

意味で、感覚能力はある一定の状態を保持しているのである¹⁸。そのことを確認できるテキストがある。

味覚の対象¹⁹（味われうるもの）は湿ったものであるから、その感覚器官は、現実態において湿ってはいけないうし、湿らされることが不可能であってもならない。というのは、味覚能力は、味覚対象（味われうるもの）としての味覚対象によって、ある種の作用を受けるからである。だから、味覚器官は、湿ってはいないが、その本性を保持しつつ湿らされることが可能なものとして、湿らされることが必然である。

(DA 422a34-b5)

これに続く行文で、具体例によって「本性を保持しつつ湿らされる」ことについて説明されている。舌があまりに乾いている場合も、極端に湿っている場合も、味覚は生じない。前者の場合は、一種の病気であり、乾いたものが（味のする）湿ったものに対抗し、湿ったものによる作用を受けることができず、湿ったものにおける味を判別できないほどのことを言い、後者は舌自身にはじめから存在した湿り気により、本来の味の識別が阻害されてしまうことを言う。従って、可能態において湿ったものである味覚器官としての舌は、ある程度の湿った状態の乾いたものである²⁰。湿ったものの情態である味を識別できるほどの乾いたものでありながら、味を識別する条件として、味覚器官は、湿ったものの情態によって作用を受け、湿らされるのである。この性質変化の中で、味覚器官は自己の本性を保持する。「湿り気の中でも味覚は自己に固有の本性を守るのである。というのは、感覚器官に生じてきた湿り気はこれを破壊するのではなく、逆にこれを保存し完成させるからである²¹」。味覚器官は、甘く湿らされる中でも、常に次の作用に対して態勢を保持しており、続いて甘い味が来てもその作用を受けることができるのである。もちろん、辛い味が来てもその作用を受けることができるのである。味覚器官は、単に湿らされるのではなく、甘く、あるいは辛く湿らされる。味は湿ったものの情態であるから、甘く、あるいは辛く湿ったものである。この違いを判別するのが感覚能力である。判別するためには味覚器官が湿らされなければならない。

ここでは、本性が保持されるのは味覚器官とされているが、味覚器官は味覚能力が働くための質料的な構成を保持しているのである。後に見るように、このような質料的な構成は他の感覚についても存在している。

¹⁸ DA 424a7-9.

¹⁹ 味（味われうるもの）は、湿ったものを乾いた土的なものに通過させ、温かいものによってこれを動かし、湿ったものをある性質のものにする自然のプロセスによって生じる（Sens. 441b17-19）。例えば塩のような、乾いた土的な性質のものが水に溶け、その水が作用を受けて生じた情態である。それは水の情態（パトス）として、湿ったものに属する。

²⁰ Simplicius (1882) 157, 18.

²¹ Philoponus (1897) 405, 19-21.

味覚能力がある種の作用を味覚対象によって受けるというのは、II 5 で特定された感覚能力の活動状態への移行のことである。次のテキストは、このことの解説として読むことができる。

味は可能態にある味覚能力を活動状態へと性質変化させることができる (*ἀλλοιωτικόν*)。実際、それは、感覚能力 (*τὸ αἰσθητικόν*) をそれがあらかじめ可能態においてそうであったものへと導くからである。というのは、感覚することは、学ぶことにではなく、学んだ知識を働かせることに類比的だからである。(Sens. 441b19-23)

味覚に関するこれら二つのテキストは、感覚が活動状態にあるとき、感覚器官と感覚能力とが同じ事態の中で一体となっていることを示している。

触覚についての規定では、両者の一体性が際立つ。触覚においては、触覚器官と触覚能力を明瞭に区別するのが難しい。触覚器官はその内に触覚能力が帰属するものである(423b30-31)。触覚において作用者は触覚器官をそれ自身が現実態においてあるのとおなじような性格のものにするが、触覚器官は可能態においてそのような性格のものであるとされる(424a1-2)。これは感覚能力に記述される規定であったが、触覚能力と一体と考えられた場合、触覚器官についても語られる。触覚器官は温かいものと冷たいものの一定の比率を含む混合体である。この混合体自体が一定の温度を持つので、同温のものを感覚することはないが、これの超過は感覚するとされる(424a2-4)。それは、「感覚は感覚対象の反対性のある種の間」だからである。ここで、「感覚」は「感覚器官」ではなく、「感覚能力」を意味していると考えが必要がある。身体部分としての触覚器官が触覚対象を判別することができるとは考えにくいからである。「感覚しうる実体自体は、感覚器官における中間の適度な混合を基体として使用するゆえに、単純な意味での中間ではなくある種の間なのである²²」。触覚においては、触覚能力が適切に判別できるのは、触覚器官に一定の温度を保つ質料的な構成が存在しているからである。

5

『動物発生論』V 1 において青い目と黒い目の視力の相違について論じられる。このテキストは視覚器官の質料的な構成について必要な情報を提供している。人間の目の色の多様性を説明する議論の中で、青い目や黒い目が生じる原因が解明される。目の中には、光と色の運動に適合した湿り気を含むものがあるが、それよりも少ない湿り気を含む目は青い目となり、より多い湿り気を含む目は黒い目となる。

²² Simplicius (1882) 165, 11-14. 二つある解釈の後者を取る。

青い目は昼間に視力がよくなく、黒い目は夜間に視力がよくない。その理由は、青い目は湿り気が少ないために光や見られうるものによって、湿り気である限りにおいて、また透明である限りにおいて、よりいっそう動かされるからである。この部分の運動 (κίνησις) が視覚活動 (ὄρασις) であるが、そうであるのは、この部分が湿り気である限りにおいてではなく、透明である限りにおいてなのである。(GA 779b35-780a4)

湿り気は光と色の運動の強さに対する抵抗として機能するが、色を正確に識別するためには、ほどよい量が要請される。「多量の湿り気と少量の湿り気の間にあるものの能力が最もよい視覚能力である」(780a22-23)。

テキストの下線部の文は、運動が活動状態と同一であると語っているように見えるが、この箇所はどう理解したらよいか。T. K. Johansen は、透明である限りでのこの部分を目の形相、つまり視覚能力とし、湿り気である限りでのこの部分を目の質料とする²³。すなわち、視覚活動は透明である限りでのこの部分の性質変化であるが、これに伴う目の質料(湿り気)における運動が視覚活動の本質を構成することはないとするのである。この解釈では透明性がそのまま能力(形相)である。だが、透明なものは質料であると考えるのが自然である²⁴。ではなぜ、その質料の部分の運動が視覚活動であるのか。端的に言えば、そこに魂が関与しているからである²⁵。次のテキストがこのことを示している。

目の内部が水からなっていることは理にかなっている。というのは、水は透明だからである。目の外部において光がなければ物が見えないように、内部においても光がなければ見えないのである。だから、目の内部は透明である必要がある。だから、それは空気ではないから、水でなければならない。というのは、魂あるいは魂の感覚しうる部分 (τὸ αἰσθητικόν) は、目の外側にあるのではなく、内部にあるのは明らかだからである。したがって、目の内部は透明であって、光を受容することができるのでなければならない。(Sens. 438b5-11)

ここでは、目の表面に映る映像を視覚とするデモクリトスの誤謬を示唆しているが、同時に、感覚が生起するのは、他者には見えない目の内部の場所であることを明らかにしている。この場所に魂の「感覚しうる部分」があると断言されている。光のほかに、どのような条件があれば、目の透明な部分に「見ること」が生起するののかという問いに対するアリストテレスの答えは、「そこに魂の感覚能力があれば」ということだけである。内部が透明でなければならないのは、光がなければ見るができないからである。透明で

²³ Johansen (1998) 106-7.

²⁴ cf. Caston (2005) 289, n.91.

²⁵ C. Shields はこのことを次のように表現している。「[感覚的] 形相の受容が感覚能力を備えた生きた存在において生起するときのみ、結果として感覚を生ずるに至る」(Shields (2016) xxxiv)。

あることは、あくまで視覚活動に必要な質料的な条件である。そして、視覚能力の存立には湿り気が深く関わっている。湿り気の割合は単なる阻害要因ではなく、視覚能力の存立のための質料的な条件である。もちろん、湿ったものには透明なものという性質が伴っている。それらの性質の割合が光と色の運動に対して釣り合ったところに最良の視覚能力が存立する。これが触覚における中間性的ように、可能態として保持されていることを認識しなければ、透明である限りの部分における運動（κίνησις）が視覚活動（ὄρασις）に関わることが理解されないだろう。視覚能力は質料の中に存立する形相である²⁶。次に、このことを前提に件の文の解釈を試みる²⁷。

6

感覚器官は、その内部に直接に感覚能力が帰属するものである（DA 423b30-31, 424a24-28）。これらは同じものであるが、感覚器官が大きさを持つのに対して、感覚能力はこの感覚器官の大きさの実質である物体のある種の比として存立する能力である。ここで、τὸ αἰσθητικόν が魂の部分であることを思い起こす必要がある。この能力は、魂の能力として、それに対応した道具として感覚器官を使用するのである²⁸。このことを鋸の例で考えてみる。木材の断裁において鋸を使う人は、断裁活動を行っているが、鋸はこの同じ活動において木材を断裁する運動を行っている。鋸は大工によって動かされているが、鋸の材質と形態とがこの断裁する運動を実現する物的な条件である。二つのもの、すなわち大工と鋸の活動状態は同一であるが、規定は別である。これと同様に「見るために²⁹」感覚器官を道具として使用する魂の感覚しうる部分は、感覚器官の運動と同じ活動状態にあるが、この活動状態は、その本質規定において、使用される感覚器官の運動とは区別される。このことから、「目の湿り気の部分の、透明である限りにおける運動が視覚活動である」という言明は、カテゴリーミステイクを犯すことなく理解することができる。視覚器官の運動と魂の視覚能力の活動状態は、それぞれ主体が異なるので、この同一命題は、同一の状態の二つの側面を記述した言明として理解することができるのである。

²⁶ DA 412b20.

²⁷ Caston (2005) は、この箇所では、視覚活動が湿り気のレベルにおける生理学的な性質変化を前提にしているので、Spiritualist の解釈では解決が難しいと論ずる (p.290)。Lorenz (2007) 214, n.72. は、形相質料論に立つが、この箇所の ὄρασις を「見ること」の質料的側面と捉える。

²⁸ 「すべての能力には何らかの器官がある。…視力は目なくして完成されず、目は視力なくして完成されない」 (GA 766a5-10)。身体が魂の能力の働きのために使用される道具であることについては、DA 407b25-26, 415b25-26, PA 642a11 を参照。

²⁹ 魂が視覚器官を使用するといっても、魂は能動的にそれを使用するわけではなく、感覚的形相に対しては受動的である。「見るために」というよりも、「見えるために」使うという表現が適当かもしれない。

では、感覚において、感覚的形相を受け入れるとはどのようなことを意味しているのだろうか。本論の趣旨に従えば、感覚器官は自然学的な連関の端で、色、音、匂い、味、触覚対象など感覚的性質をその性質の基体を伴わずに受け入れる一方、感覚能力はこの同じ場所で、その能力を活動させ、感覚器官に受け入れられた感覚的性質を自らの基準で判別するということになる。感覚能力にも感覚的性質は受け入れられる。ただし、その受け入れ方は感覚器官とは異なる。感覚能力が感覚的形相を受け入れることは、魂がこれを受け入れることであるから、それは、われわれの体験世界に対象が現れることである。その現れ方を示したのがⅢ 2のテキストである。

アリストテレスは、Ⅲ 2において、「見る」「聴く」など感覚の活動状態について、「感覚対象と感覚能力との活動状態は同一であるが、その本質規定は異なる」(425b26-27)と記述する。これらが同一であるというだけではなく、「作用する活動と作用を受ける活動とが作用するものの内ではなく、作用を受けるものの内に生じるように、感覚対象と感覚能力の活動状態も感覚能力の内に生じる」(426a9-11)とされる。ここでも、『自然学』Ⅲ 2の図式が範例となっている。音の活動状態である音響活動は、聴覚の活動状態である聴覚活動と同一の活動状態として、聴覚能力を持つものの内に生じている。これは、心の中で音が聞こえている事態である。ここでいう、聴覚能力の内にある音響活動は、感覚能力に受け入れられた「質料を伴わない感覚的形相」である。

音は音を発することのできる固い滑らかな物体に打撃を加えることによって生じるが、それは空気に対する打撃となり、それが反響して「活動状態における音」(419b9-10)となる。両耳の鼓膜より内部に「生来の空気」があり、これは外の空気の運動のすべての差異を正確に感覚するために、動かないよう鼓膜の内部に閉じ込められている(420a9-11)³⁰。この内部の空気は常に固有の運動をしている(420a16-17)。ここにも触覚と同じような中間性がある。聴覚はこの空気の中にあるので、外部の空気が動くとき内部の空気が動かされる(420a4-5)。聴覚器官(内部の空気)は自身の振動を保持しつつ外部の音の振動を受け入れる。内部の生来の空気に伝えられた外部の振動は、音響活動となって聴覚能力に現れ、聴覚能力は活動状態になり、音響活動と一体化する。

音が活動状態になってはじめて音の高低が明らかになるが、聴覚能力は聴覚器官を道具として使用して外部の振動と内部の振動との差異を判別(識別)する。判別という聴覚能力の「はたらき」によって、一体化している音響活動と聴覚活動が本質規定において異なることが明らかになる。この「はたらき」は、聴覚活動を音響活動から区別すると共に、聴覚能力をその器官から区別する。聴覚器官にも感覚的形相は受け入れられているが、そこでは、外の空気から振動を受け入れるという通常の変化が生じている。これは外部の

³⁰ 聴覚器官は空気からなる。(PA 656b16)

自然学的な運動と接続する生理学的な過程である。聴覚能力はこの二つの振動の差異を判別する。聴覚器官は、魂の能力がはたらくに際して使用される道具として機能するのである。感覚器官が自然的因果連鎖の端で作用を受けて運動することと、感覚能力がその活動状態に移行して感覚することとは、同時に発生している一つの事態である。

参考文献

テキスト、注釈、翻訳

Hett, W. S. (1936), *On the Soul, Parva Naturalia, On Breath* (The Loeb Classical Library), London.

Hicks, R. D. (1907), *Aristotle De Anima*, Cambridge.

Ross, G. R. T. (1906), *Aristotle De Sensu and De Memoria*, Cambridge.

Ross, W. D. (1955), *Aristotle Parva Naturalia*, Oxford.

Ross, W. D. (1956), *Aristotelis De Anima* (Oxford classical Text), Oxford.

Ross, W. D. (1961), *Aristotle, De Anima*, Oxford.

Shields, C. (2016), *Aristotle De Anima*, Clarendon Press.

内山勝利 (2017) 「自然学」(『アリストテレス全集 4』) 岩波書店

坂下浩司 (2014) 「感覚と感覚されるものについて」(『アリストテレス全集 7』所収) 岩波書店

中畑正志 (2001) 『アリストテレス 魂について』(西洋古典叢書) 京都大学学術出版会

中畑正志 (2014) 「魂について」(『アリストテレス全集 7』所収) 岩波書店

古注

Simplicius (1882), *In libros Aristotelis De anima commentaria. Commentaria in Aristotelem Graeca*; 11, ed. M. Hayduck, Berlin.

Philoponus (1897), *In Aristotelis De anima libros commentaria. Commentaria in Aristotelem Graeca*; 15, ed. M. Hayduck, Berlin.

研究書、研究論文

Broackes, J. (1999), 'Aristotle, Objectivity, and Perception,' *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 17, 57-113.

Burnyeat, M. (1992), 'Is an Aristotelian Philosophy of Mind Still Credible?', in Nussbaum and Rorty (eds.), *Essays on Aristotle's De Anima* (1992 edn.), 15-26, Clarendon Press.

Burnyeat, M. (1995), 'How Much Happens When Aristotle Sees Red and Hears Middle C?' Remarks on *De Anima* 2. 7-8', in Nussbaum and Rorty (eds.), *Essays on Aristotle's De Anima* (1995 edn.), 421-34.

Burnyeat, M. (2002), 'De Anima II 5', *Phronesis* 47, 28-90.

Caston, V. (2005), 'The Spirit and the Letter: Aristotle on Perception', in Ricardo Salles (ed.),

- Metaphysics, Soul, and Ethics in Ancient Thought*, 245-320, Oxford University Press.
- Johansen, T.K. (1998), *Aristotle on the Sense-Organs*, Cambridge University Press.
- Johansen, T.K. (2012), *The Power of Aristotle's Soul*, Oxford University Press.
- Lorenz, H. (2007), 'The Assimilation of Sense to Sense-Object in Aristotle', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 33, 179-220.
- Sorabji, R. (1974), 'Body and Soul in Aristotle', *Philosophy* 49, 63-89.
- 齊藤和也 (1998) 「アリストテレスの感覚理論について」, 『香川大学経済論叢』 70-4, 55-82.

【後記】

本稿は、2018年9月8日に国士舘大学で開催された「第22回ギリシャ哲学セミナー」での発表原稿に若干の修正を加えたものである。当日は多くの方々から貴重なご質問やご意見をいただいた。とくに、永井龍男氏からは、感覚の成立する場所についてご質問をいただいた。本稿では、感覚の成立する場所を個別的感覚（器官）と捉え、問題設定上、共通感覚の成立する場面には言及していないが、この問題については、白色と黒色など同種の固有感覚形相については個別的感覚が識別し、黒色と甘味など異種の固有感覚対象の相違や統一、共通感覚対象の感覚については、共通感覚または固有諸感覚からなる全体としての感覚システムが判別するという解釈を採るべきだと考える。（次の論文は通説に対して異論を唱え、個別的感覚はそれに固有の感覚的性質を識別するとの解釈を提示している。“M. Pelärä, Aristotle on Perceptual Discrimination, *Phronesis* 63 (2018) 257-292”）また、中畑正志氏から、受動の結果として心に現れているものを判別するという図式は新プラトン主義的解釈ではないかとのご指摘があった（中畑氏の著書『魂の変容』219-223）。本稿の第7節において明らかにしようとしたのは、感覚器官及び感覚能力が感覚的形相を持つものによって作用を受けてそれぞれにおいて質料抜きで感覚的形相を受け入れる際の、反応の仕方の違いである。感覚的能力の受動には感覚器官の受動にはない判別（識別）という働きが伴う。魂の感覚能力に対して外在する「可能態にある感覚されうるもの」（426a9）に感覚的能力が遭遇すると、「可能態にある感覚されうるもの」が感覚能力に作用して感覚能力が現実態へと移行する。これは「感覚されうるもの」が可能態から現実態へと移行することと同時であり、これらは同じ出来事の二つの側面である。この出来事は、たとえば「白が見えること」と記述できる。これは、一方では「白が（心に）現れること」であり、他方では「白を見ること」である。ここで「白の現れ」は視覚の判別する働きに拠るが、視覚を働くようにしたのは「可能態にある白」の作用である。（感覚能力の本質的な働きに「判別（識別）」が含まれることを示すテキストは、DA 426 b 8-12, 41814-15 である。Hicks (445 頁) はこの点について次のように注釈している。“The same process may be viewed in one respect as *πάθος*, in another respect as *κρίσις*“. なお、「可能態に

ある感覚されうるもの」の外在性とその感覚能力への作用については、*Met.* 1010 b 33–37でも断言されている。) さらに、渡辺邦夫氏から、上記の心について、統覚的なものか、それとも能力的なものかのご質問があった。心とは、感覚的能力の識別能力が現実活動態になったときに、感覚器官における受動的状態が識別され、その限りにおいて感覚的形相が現れる場であると考えることができる。